

在宅勤務スタート！

「FLANKER」編集長

桜井 龍一郎

私が頸髄に損傷を負い、手足の自由を失ってからもうすぐ10年になります。退院した直後は、外出といっても母に手動の車いすを押してもらって、近所を散歩するぐらいしかできませんでした。やがて電動車いすを利用するようになって一人で外出できるようになり、今では電車に乗って大阪などへも出て行けるようになりました。これは、退院直後には考えられない事でした。怪我をしてできなくなった事が、このように介助や器具の工夫で僅かではありますが可能になっています。しかし、まだまだできない事の方が多く、実現の方法すら見つからないものもたくさんあります。私にとって、就職もその一つでした。

就職といっても、車の運転ができないし、電車にもスムーズに乗り込める駅は少なく、通勤できる範囲に限られます。また、就職に必要な資格や技術もありません。また辱そうなどができやすいため、長時間車いすに乗って仕事に従事する事も不可能です。

でも私にとって、社会参加と就労は大きな夢でした。アップ・ステーションの活動に参加したのも、なにか就労への手がかりが見つからないか、と思ったのがきっかけでした。

機関誌「FLANKER」の編集に携わり、私と同じ想いを抱く障害者が多い事を実感し、私なりに就職へのチャレンジを試みる事にしました。先ず情報処理の資格に挑戦です。プロップの活動を通じて知り合った、コンピュータ専門学校の先生が試験科目の一つであるプログラム言語のCOBOLをボランティアに教えて下さる事になりました。自宅への訪問講習です。10月に2種の試験を受けるため、今、勉強中です。

また「FLANKER」を編集・発行する中で「在宅勤務制度」というものが有る事を知り、職安に求職登録に行きました。しかし、私の住む兵庫県N市の職安では「在宅勤務は新しい制度なので、求人など1件も無い」と言うばかり。求人情報はコンピュータで全国どこかの職安からでも取り出せる、と聞いていましたが、

「無い」「無い」の一点張り。登録もしぶしぶという態度で「制度ができて、窓口に熱意がなければ広がらないだろうな」と、しみじみ思いました。

こんな私に、就職の話は突然舞い込んできました。

プロップの活動が新聞などで報道され、機関誌



の編集をしている私に関心を寄せて下さる社長さんが現れたのです。大阪府下でコンピュータグラフィック（CG）の制作をしているその会社は三次元CGの技術者が不足し、外注が多い事からフロッピーのやりとりや、デジタル回線を使つての在宅勤務は、技術さえあれば障害の有無は問題にならない――と社長が判断され、職安に「この人を」と私を指定して求人依頼を出して下さったのです。面接も社長の方から自宅に出向いて下さいました。

私は大学で土木・建築関係の勉強中にスポーツ事故で障害を負ったので、公共事業などの設計に関わるこの会社の仕事がぜひやってみたく、「一生懸命勉強しますから、どうか採用して下さい」と社長にお願いしました。採用が決定した時は、夢のようでした。

ちょうどプロップ代表の竹中さんが「在宅勤務制度」というテーマで大阪府労働部の高橋氏と対談したばかりで（FLANKER 2号に掲載）高橋氏も「府下の企業から在宅勤務受け入れの第1号が生まれたのは朗報だ」と喜んで下さいました。社長が相談に行かれた府下の職安も、制度について熱心に説明されたそうで、職安によって（あるいは管轄の自治体によって）こんなに対応に差があるものか！――と驚きました。

必要な機器はマッキントッシュコンピュータ。これを会社とNTTのデジタル回線でつなぎ、データのやりとりを行って仕事を進めます。今までNECのコンピュータをキーボード操作だけで使っていた私にとっての問題は、マウス操作と、キーボードの2つのキーを同時に押す事でした。指が動かないのでマウスは全く使えませんし、CG制作に不可欠なドラッグ操作（マウスボタンを押したままのマウスの移動）もできません。

しかしこれは、マウスの変わりにボタンのロック機能あるトラックボールを使用する事で解決しました。トラックボールとは、上面のボールを転がして操作するもので、ちょうどマウスをひっくり返したような仕様です。また キーボード操作は マッキントッシュのEasy Access というユーティリティソフトで順次キー操作する事で解決しました。また大きな図面を見ながらの作業も、図面を動かしながらの入力ができない事が問題ですが、当面は机に乗る小さな図面を見ながらする仕事を回してもらう事になりました。仕事は、長時間車いすに乗ると床ずれの心配があるので、現在はベッドの上で行う事が多いです。給料は月給で受取ります。就業時間が短い分だけ、他の従業員より少ないですが、計算方法は同じです。その他厚生年金、健康保険、休暇など全ての面で他の従業員と同じ条件です。

現在はまだ簡単なグラフィックの作成しか行っていませんが、できあがっていく図を見ながらの作業はけっこう面白いものです。早く本格的な図面の入力ができるようになるため、ソフトの使い方を覚えている真っ最中です。これから先のことには不安もありますが、

器具を工夫するなどして持続して仕事ができるようにしていきたいと思っています。焦っても仕方がないので、自分にできることを地道にやってみようと思います。

障害者を正規雇用した企業には、給与や建物の改造、機器の購入などに対して様々な助成金が適用されます。私の場合も、自宅にかなりの機材が必要ですし、障害に応じたサポート機器も必要です。社長は「助成がなくても、君が仕事が出来れば雇用する」と言ってくれましたが、やってみなければ分からないのが仕事ですし、仕事を覚えるための期間も必要です。助成は、雇用主だけでなく、障害者にとっても必要なものだと、自分が就職してより痛感しました。就職して痛感した事は他にも色々あります。重度障害者に就労できるだけの知識、技術を教える機関が無い事、企業の障害者を雇用する事への不安、障害者を雇用した場合に利用できる行政制度のアピール不足、等々、課題はいっぱいあります。でも、プロップのアンケートでも分かるように、重度障害者自身の就労意識は高まりつつありますし、就労への動きはますます大きくなるでしょう。障害のあるなしに関わらず、自由に社会参加できる世の中が1日も早く実現する事を心から願います。

私の在宅での就業が、その促進のための一助になれば嬉しいと思います。

